

## 「船頭平閘門」「海津市歴史民俗資料館」など見学

コロナの関係で3年間ではできなかったバスを使い、遠出しての研修会は久しぶりに実現。会員の交流も含め楽しい勉強会となりました。以下はいただいてきたパンフレットから要点を抜粋し、一部付け加えて私なりに要約しました。

### 今回の研修内容

◎日時……………令和5年11月14日 8時30分～15時50分

◎コース……………船頭平閘門→治水神社→木曾三川公園→海津市歴史民俗資料館→おちよぼ稲荷

◎参加者……………17名

### 1 明治35年(1902)に完成した「船頭平閘門」

到着した船頭平閘門では案内時間少し前だったので、記念館の見学をしました。この辺りの輪中に関する説明と閘門の説明がパネルで展示されていました。まもなく係りの方が呼びに来てくれて、閘門まで行きその場で説明を受けました。現在も多くの小型船、レジャーボートなどが利用しています。通行は道路と同じで無料と言いますから意外でした。昔は大の大人4人でゲートの開閉をしたと言います。今はもちろん電動で、ゲートを作動させ実際に水を入れる様子を再現してくれました。こうして閘門を通過するには20分ほどかかるそうです。展示されている、取り換えた古い扉を見ましたがその大きさに驚きました。これを人力で回すことは容易なことではありません。



この運河は水位の違う木曾川と長良川を結ぶ運河で、良く知られるパナマ運河と同じような構造です。パナマ運河は1914年に完成していますが、日本人技師青山士(あきら)も参加しています。彼は帰国後に信濃川分水路の補修や荒川放水路の建設に携わりました。規模が桁違いとはいっても、そんなパナマ運河よりも12年前に同じ構造の運河が建設されていたことに驚きました。日本の土木技術が先進的



長良川側から木曾川側を見たところ



閘門の扉が開いているところ

なものだった証です。

## ◎運河の概要

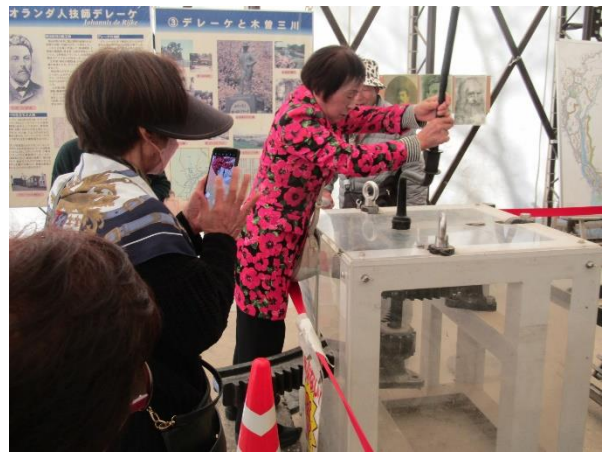
所在地は愛西市ですが、設置の原動力となったのは桑名にありました。桑名の佐藤義一郎がその中心人物で、建設運動を展開して実現に至りました。

閘門式運河は木曾川と長良川の水位が違うために考えられましたが、大潮の干潮時には水位差が2m以上に及びます。閘門は片側2枚の扉で締め切りますが、1枚が重さ約10トンもあります。平成6年(1994)までは屈強な男性4人が、それぞれ1枚の扉を手回して開閉していたといいます。

閘門の設計と建設工事に携わった主任技術者は青木良三郎で、国内で3番目に造られた近代閘門で、重要文化財に指定されています。(1番古い物は江戸時代8代将軍吉宗の命で、現在のさいたま市に造られた見沼通船堀。2番目は?)



取り換えられた古い扉



扉の開閉を手動で行うと、こんな具合に

## ◎運河建設の功労者

この運河は佐藤義一郎らが国会に請願して造られたと多くの記録があります。佐藤義一郎は桑名の廻船問屋「港屋」の経営や銀行、三重県初の病院の設立などに携わり、明治26年(1893)に運河設立請願書を持参して上京した実業家でした。後に廻船問屋から撤退して、木曾三川の豊富で良質な水を活かし、みそ・しょうゆ醸造に移行しました。これが今に続く「サンジルシ」です。

## ◎運河建設の不思議と謎

大同大学名誉教授久保田稔氏の講演で、船頭平閘門の「三つの謎として」以下のことを述べています。

### フィート単位での設計

一つ目のフィート単位の設計については、船頭平閘門を設計した青木良三郎技師はフィートを自在に使用できました。しかし、現場の職人は尺や間の感覚がしっかり体にしみこんでおり、フィート単位で構造物を造ったとは考え難く、1フィート30.48cm、1尺30.3cmは数値が近いことからフィートを尺に読み替えて造ったのではないかと考えられます。

### 煉瓦屑の使用

明治初期はセメントに煉瓦屑を混入すると強くなると考えられていました。ここでもセメント量の5パーセントに混入したと記されています。おそらく煉瓦屑は前後二か所の扉室の最下部に混入された。

## 古レールの使用

基礎のコンクリートに古レール 700 尺を埋設の記録があり、コンクリートの強度不足の心配が払拭できなかつたのではと考えられています。

青木技師の恩師・田邊朔郎は、明治36年に琵琶湖疎水運河に古レールを用いたメラン式アーチ橋を架橋しました。この橋が日本初の鉄筋コンクリート橋と言われているますが、青木はその1年前に船頭平閘門で古レールを用いたコンクリートで建設しています。

## 2 宝暦治水と治水神社

つぎは治水神社を訪れて、お参りをしました。治水神社は宝暦の治水の過程で亡くなった、薩摩藩士85名を「祭神」として顕彰するために建立されました。

### ◎宝暦治水事件とその背景

江戸幕府9代将軍徳川家重は薩摩藩主・島津重年に川普請工事を命じた。この工事において木曾三川の治水事業(いわゆる宝暦治水事業)の過程で、薩摩藩士51名が自害、33名が病死、工事完了後に薩摩藩総指揮の家老・平田鞞負(ひらた ゆきえ)も自害したとされる事件。

木曾川・長良川・揖斐川の三河川は濃尾平野を貫流し、下流の川底が高いことに加え、三川が複雑に合流、分流を繰り返す地形であること。さらには小領の分立する美濃国では各領主の利害が対立し、統一的な治水対策を取ることが難しく、洪水が多発していた。

そのような中で江戸幕府の命で宝暦4年2月～宝暦5年5月まで、薩摩藩などが御手伝普請として、人足・資金の負担を行い多くの犠牲者を出しながらも、濃尾平野の治水対策のため木曾川、長良川、揖斐川を分流する工事で、三川分流治水ともいう。工事は簡単なものではなく、やり方も度々変更される見直し工法によって進められたため、費用も当初の予定より多額の費用が必要になった。薩摩藩が支払った費用は約40万両と言われている。

### ◎治水事業のその後

宝暦の治水は一定の効果を上げ、下流域の水害は減少した。しかし、堰の破損はその後も続きあちこちで水害に悩まされていた。そのため御手伝普請はその後も続き、薩摩藩は文化3年(1806)と文久元年(1861)に普請に参加している。

明治10年(1877)にお雇い外国人ヨハニス・デ・レーケの指導による木曾三川分流工事が開始され、明治33年(1900)に竣工した。

### ◎宝暦治水の顕彰

現桑名市の豪農西田喜兵衛による顕彰運動が盛んとなり「治水雑誌」で大きく取り上げられ、宝暦の治



水で薩摩藩士に多くの自害者が出、平田も切腹したことが広まった。

明治33年(1900)に木曾三川分流工事の竣工式が行われ、内閣総理大臣山縣有朋らが参列した。岐阜県の社会教育活動家岩田徳義も検証活動に力を入れた人物で、死亡した薩摩藩士を「薩摩義士」と名付けた。その後「薩摩義士顕彰会」が設立され、昭和5年(1938)に「薩摩堰遺跡記念碑」が建立された。

さらに、昭和13年(1938)には、平田鞠負(ひらた ゆきえ)ら85名の薩摩藩士殉職者を「祭神」として顕彰するために「治水神社」が建立された。その神社名の石碑は薩摩藩出身の東郷平八郎が揮毫した。この顕彰活動において薩摩義士の功績は「赤穂義士以上である」、などと強調される傾向となり幕府と薩摩藩の対立がより強調されるようになった。

※宝暦治水事業を薩摩藩が実施した事が縁で、昭和46年鹿児島県と岐阜県が姉妹県に。その20周年記念事業として、鹿児島県の木「カイコウズ」を木曾三川公園～関ヶ原まで35kmに植えて、「薩摩カイコウズ道路」と名付けました。

### 3 高須藩松平家

慶長5年関ヶ原合戦時、高木盛兼は豊臣家臣として西軍に加担した。しかし、前哨戦で東軍の攻撃を受け落城した。翌年、徳永寿昌が関ヶ原合戦の戦功により二万石加増されて五万石の大名として高須城に入り、高須藩を立藩した。寿昌は三年かけて城を修築、城下町も整備した。

今回の研修で一番興味があったのは、高須藩四兄弟の事です。そこで訪ねたのは海津市歴史民俗資料館。まるでお城と思わせる立派な石垣の上に、これもお城風の建物がそびえている。中でも驚いたのは能舞台が造られていることだ。そんな立派な施設が海津町の時代に建設されたと言います。そして、屋外



まるで御城のような歴史民俗資料館



内部には能舞台が

展示として輪中低湿地の米の生産を高めるための手段であった、堀田が小さいながら復元してあります。また、昭和29年から始まった高須輪中埋め立て干拓事業で、堀田の埋め立てに利用されたトロッコや輪中内の悪水を排除する渦巻ポンプも展示されています。

#### ◎高須藩の成り立ち

尾張藩二代藩主徳川光友の次男松平義行は、幕府領だった信濃国伊那郡、水内郡、高井戸内の三万石を

新たに拝領した。義行は当初市ヶ谷にあった尾張藩江戸屋敷に住み、後に四谷に居住した。元禄13年(1700)水内・高井戸両郡の一万五千石に代わって美濃国海西・石津両郡内に一万五千石を拝領した。

高須に館を置き、藩主は江戸屋敷に居住した。尾張徳川家の分家として家格が高く、徳川御三家、御三卿に次ぐ名門であった。宗家に後継者がいないときには相続者を出すなど、尾張藩お控えとして宗藩と表裏一体の関係であった

明治2年(1869)版籍奉還、十四代藩主義生は高須藩知事となるが、翌年高須藩は名古屋藩と合併してその歴史を終えた。

### ◎高須四兄弟の活躍

十代藩主義建(よしたつ)の子六男一女は、男子が全員大名となり、女子は上杉家に嫁した。そのうち、次男義くみ、五男義比(よしちか)、七男容保(かたもり)、八男定敬(さだあき)の四人は幕末維新史に残る活躍をした。世に高須四兄弟と称された四人の略歴は以下。



#### ◆徳川慶勝(よしかつ) 1824～1883

初めは義恕(よしくみ)、尾張藩十四代藩主となって慶勝(よしかつ)と改めた。時の大老井伊直弼と対立して安政五年(1858)隠居させられたが、四年後に許される。元治元年(1864)第一次長州追討の総督に押され寛大な処置で事態を收拾した。慶応四年(1868)明治政府の議定職、明治三年(1870)名古屋藩知事となったが、明治八年(1875)尾張徳川家を再相続した。



#### ◆徳川茂栄(もちはる) 1831～1884

初め松平義比(よしちか)として高須藩十一代藩主となったが、安政五年(1858)兄慶勝(よしかつ)の後を受けて尾張徳川家を継ぎ十五代藩主となり、名を茂徳(もちなが)と改めた。体制を整え一橋慶喜(よしのぶ)を助けたが、文久三年(1863)家督を慶勝(よしかつ)の子義宣(よしのり)に譲った。その後、名を茂栄(もちはる)と改め、慶応二年(1866)慶喜が将軍になったため一橋家を相続した。

#### ◆松平容保(かたもり) 1836～1893

会津松平家の養子となり、嘉永五年(1852)九代藩主となる。京都守護職に任じられ孝明天皇に深く信頼されたが、天皇の死後は幕府側が劣勢となる中で鳥羽・伏見の戦いの後会津に戻り、征討軍と戦って敗れた。会津戦争は戊辰の役で最大の激戦であり、鶴ヶ城籠城戦や白虎隊の秘話で知られている。

#### ◆松平定敬(さだあき) 1847～1908

桑名松平家の養子となり、安政六年(1859)十三代藩主となる。元治元年(1864)京都所司代に任じられ、兄容保(かたもり)と共に京都の治安維持に当たった。鳥羽伏見の戦いの後、江戸から柏崎に移りさらに会津で容保と共に戦った。その後函館に渡り抗戦したが、明治二年(1869)藩老の説得を受け入れて投降した。

※高須四兄弟は実の兄弟でありながら敵味方に分かれ、それぞれの立場で激動する幕末を生き抜きました。彼らの働きがなければ幕末維新の様相は変わっていたとさえ言われています。小藩ながら高須松平藩が重要視される一因でもあります。

#### ◆臥龍山行基寺

初代義行が整備した高須藩松平家の菩提寺。濃尾平野を見下ろす養老山地中腹に位置し、歴代藩主の墓碑九基があります。マイクロバスでお寺さんまで行くことは、道路事情から難しいということで参拝・見学はできませんでした。

この後、海津市歴史民俗資料館を出ておちよぼ稲荷に立ち寄り、お参りして各自で昼食をとり帰路につきました。



参加者17名 海津歴史民俗資料館にて